HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	移住からみた古代北方世界 : 婚姻が結ぶ社会・移住が拓く世界
Author(s)	松本, 建速
Citation	110-129 新しいアイヌ史の構築 : 先史編・古代編・中世編 : 「新しいアイヌ史の構築」プロジェクト報告書2012
Issue Date	2012-03-31
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/56285
Type	report
File Information	pt2ch5.pdf

Instructions for use

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

第 5 章　移住からみた古代北方世界
―婚姻が結ぶ社会・移住が拓く世界―

松本　建速

よろしくお願いします。東海大の松本と申します。私、生まれたのは洞爺湖温泉ですが、育ちましたのは、小学校 5 年生までいた洞爺村でありまして、その洞爺村にいたころに歴史についての疑問というのを持ってしまったわけです。というのは今、小学校 5 年生までいたと申しましたが、小学校時代に学んだ歴史がすべて、すべてといいますか、小学校 3 年のころ、副読本で地元の歴史を学びましたが、そこで語られたのがこのことだったのです。

小学校ですから先人が切り開いてつくったのだよと言われましたが、100 年ぐらいしかたってないというのが私はよく分からなかったのです。歴史が 100 年ってどういうことだろうと。それから小学校に入る 1 年前、1968 年にちょうど道博（北海道大博覧会）と子供のときの頭に残っていますが、北海道開拓 100 年ということで、いろいろな展示も行われました。開拓記念の塔なんていうのは、怖い、悪魔の塔だなと子供のころ思っていたのですが、それを見て 100 年というのが、私でも数えられる年代しか北海道の歴史がないってどういうことなのか、まったく分からなかったのです。それがまず第 1 だったのです、歴史について興味を持つといいますか、反感を持ったのが。

それが高学年になりますと歴史を学ぶわけですが、今度は副読本ではなくて教科書で。副読本は地元の歴史のことが描かれていましたので、香川県から入植したのだよという話がありました。しかし、その前に人がいなかったのかなと思ったわけですが、それは強く心に残ったのですけど。高学年になって学んだ歴史は、内地の歴史だったのですね。それが歴史なのだろうかと、私、本当に驚いてしまったのです。

そういうこともあって考古学を次第に学ぶようになっていったわけなのですが、原点なので、いつものこの写真を使っていますけど、これは洞爺村の香川というところの写真です。奥にあるのはご存じの羊蹄山です。ほとんど人は住んでいません。大部分が畑です。今はもう、だいぶ農業をやっている人がいなくなってしまいました。

その開拓した人たちの写真が残っていまして、これなのです。これは『洞爺村史』からコピーさせていただいたものではありますが、開拓団の人の写真です。男ばっかり写っていますけど、当然、女の人も来ていまして、最高齢者が確か 51 歳です。その方が団長で、大方は 30 代以下です。入植する人というのは若いなというのを、私、思っていました。それが念頭にあります、私の考古学の。ですから移住者の大部分は若者だと思っています。

年を取った人はもちろんいるのですが、その人はもとのところに残っていて、移住者は志といいますか、何かを持った若い者です。すでに何かをした人ではありません。ですから考古資料を見る場合、作っているものがまったくもともとのところと違うとか、まったくといいますか、少し違うとか、そういうことはよくあるだろうと思いますが、私は大切なのは概念といいますか、

心の方だと思っているものですから、そのような見方をします。

そういうことで最初にこの2枚の写真をお示しして、あとは少しまた明るくしていただきまして紙を使ってお話しいたします。先ほどの、志、あれは写真の一瞬のときに一生懸命、うんって、心を出して撮影されたのだとは思うのですが、そのような気概を持った若者たちが開拓したのだということです。女の人はもっと若かったわけですが、そういうことです。

私、あまりこういうところで話したことがないものですから、どんな資料を作ればいいのかよく分からなくて、話したいことも話せなくなってはいけないと思って、ちょっと長々と文章を書いてしまいました。失礼いたしましたが、最初のところを読ませていただきたいと思います。

いただいたテーマというのが、「移住から見た古代北方世界」でした。私、普段は北方という言葉は使わなです。これは何か軍部が使ったのだという話を学生のころ先生に聞かされて、それ以来、北方は使いたくないと思っていたものですから使わないんですが、北海道大学には北方文化研究所というのもありますし、国、国家の政策とはこういった言葉がよく合っているんだろうと思ったものですから、そういうところでの発表でもあるのでいいでしょうということで、そのまま使いました。

それから基本的には東北北部と、私の生まれた道南のあたりぐらいまでしか視野には入ってなかったですが、研究はしてないですけれども、せっかくいただいたテーマなので勉強もしてみようと思って、北方世界、そのまま使いました。ただし、内容としては遺物を見る、あるいは遺構を見る、遺跡を見る場合、あるいは集落というものを見る場合には、そこに婚姻関係が存続したから集落が存在しているのですよと、もし仮にそれがなかったら集落は終わりますということを強調したいが故に、副題として「婚姻が結ぶ社会」というのを付けました。

それから「移住が開く世界」と。もちろん移住して世界といいますか、先ほどの開拓された香川もそうですが、それまで使われていなかった土地が広がっていく場合には、移住というのもありますので、その2つを見ましょうということで副題として入れました。

初めに。今回のシンポジウムのテーマは、「古代エミシの形成・展開とその実態」です。ただし古代蝦夷はまずは古代日本国の正史に記された観念であり、これは文献史学でずっといわれていることではありますが、そのもととなる表記、蝦夷は平安時代のうちに見られなくなるので、考古学的にはいかなる実態であるか、それをどのような史料を用いて説明すべきなのかから考察せねばならないと思います。

蝦夷という表記は『日本書紀』には見られますが、同時代に成立した『風土記』にはありません。現在、活字で見られる『古事記』には1カ所ありますが、それは寛永21年（1644年）の版本以来であり、真福寺本などの筆写していたころのものにはありません。また、正史においては蝦夷征討を終了した9世紀前葉には見られなくなり、その表記が事象等、その人々に由来するものではなく、古代日本国との関係を示した名称にすぎないことが分かる。すぎないというのは、私はこのような言い方をいたしますが。しかも、蝦夷表記は1つの集団を指していると決めてかかれるわけでもありません。

結論から述べれば、蝦夷は民族と認識できるような1つの集団ではありません。観念としての国を成立させるとき、すなわち観念上の国境線を引いた途端に、その外の存在が生まれただけであり、古代国家側がつくった観念である。もちろんこれも集合ですから、何かこれだと言っ

たら、途端にその外側ができたという、それくらいのことです。ですから当然、国家側には、もちろん国家といっても国民全体は知りませんが、これをつくった人の頭にはおぼろげなものがあるにせよ、正確に何かを把握していたわけではないはずではありますが、国家ができた、あるいは国境線を観念上引いてしまった途端に、当然出来上がるたぐいのものであるということです。

国民すなわち皇民を明らかにすることは、それ以外の人々を示すことでもある。東北方という方角の外側にいた存在を蝦夷としたのであった。中国で東夷（トウイ）といわれた秩序の外にいる東方の人と関係は同じである。東夷には和人も、さらにその東の人々も含まれました。蝦夷とは国を成立させた人々の観念上にある辺境地域や、この辺境というのも当然、国の方々の考え方でありますが、いずれにせよ、これも観念の辺境です。

文字上、言えても、正確にあそこですというふうに言えるわけではないということで、こんな言い方をしてありますが、観念上にある辺境地域や、その外側に住む人々であり、実態としてはさまざまな系譜の人々が含まれることになるが、1 つの名称で正史に記したが故に、1 つの集団であるかのような像が描かれ、その関係が続く限り、そのように利用されてしまったのであると考えています。従って古代蝦夷の形成、展開の部分に、古代の東北北部から北海道の人々を入れ、その実態を述べるというのが本報告の趣旨となります。

古墳時代並行期のうち前方後円墳の時代には、東北北部から北海道にはそれらの古墳を造営した人々、すなわち大和言葉を話す人々は居住しておらず、縄文時代以来の言語の系統上にある、アイヌ語系言語と話す人々が住んでいた。それが 6 世紀後葉以降、新式群集墳の時代に入ると、東北北部には大和言葉を話す人々、北海道南部にはアイヌ語系言語を話す人々、北海道北部および東部には、それらとは別の言語を話す、オホーツク文化の担い手たちが暮らすようになっていたというのが、今報告の内容である。

ただし、オホーツク文化の担い手たちと、擦文の人たちの言語がどのくらい違っていたのかというのは、ちょっと私は分かりません。まだ変化している途中で、分離していく途中だったかもしれません。それについては分からないというようなことを途中でも申し上げますが、一応、3 つに考古学上の文化である、オホーツク文化、擦文文化、それから東北北部の文化に関しては、大和言葉というふうに分けてみたというところです。

簡潔にするために、人々の文化を言語に置き換えて、今、述べました。古代の当該地域に居住した人々の系譜を問うという形で話を進めます。北海道には 21 世紀現在、570 万人の人々が暮らしており大和言葉が話されていますが、それは 19 世紀後葉以降に起こった和人の移住による文化の置換の結果です。一方、東北北部における大和言葉化は 5 世紀後葉、6 世紀後葉から 8 世紀、9 世紀から 10 世紀に、各地でさまざまな地域からの人々の移住を経て完了していたのであった。

これが私の考えていることです。ですからさまざまな地域としか言えないのではないかと実は思っています。つまり移住した後は婚姻関係がいろいろ続くわけです。ですから 1 地域からのみ婚姻、女の人を迎えるということはおそらくないので、さまざまなところからとしか今は言わないことにいたしますが、もちろんその痕跡を遺物から見ることは可能ですから、多少は見てみたい、言ってみたいと思います。

資料と方法です。一応、北方という言葉を使いますよというお話をいたしましたが、地域は限定せざるを得ないので、今回、私が使う資料の範囲を述べますと、米代川および馬淵川流域以北です。これは図版の方の図表編の方の 28 ページ、一番最後です。一番後ろの地図が載っているところを見ていただきたいと思うんですが、失礼しました、すみません、27 ページの方にしてください。

27 ページの図の 13 となっている一番右下にある図ですが、この米代川、これは秋田県北の川ですが、それから馬淵川は岩手県北部の川になりますが、これ、ちょうど第 13 図でちょっと灰色にしてあるところです。それより北です。それからこの図は不正確ではありますが、三陸沿岸の津軽石川という川がちょうど盛岡市の真東の方、山田町というあたりに流れていますけれども、その辺から北を今回、北方と呼びましょうというふうに私はしております。その中でも津軽海峡までを東北北部と呼びます。それから石狩低地以南の北海道を北海道南部、それより北を北海道北部、東を東部と呼びます。

この北と東のところで、私が明瞭に線を入れなかったことでお分かりのように、私自身、道東、道北については自分で研究していないものですから、自分で線を引けないのです。これが概念だということです。畿内あたりで北の方のことを書いた人たちの頭には、当然、今の我々のような地図はありませんし、方角と遠近の関係、そういうことしか言えなかっただろうと思いますが、私も道東、道北については、申し訳ないですが、この程度だということです。

一般には盛岡市と秋田市を結ぶラインよりも北を東北北部とする場合が多いですが、盛岡市域には 803 年に志波城、それから秋田市域には 733 年に秋田城が設置されており、それより北の地域とは古代日本国との政治的距離が違います。そして 8 世紀から 9 世紀には、古代日本国内ですでに日本国内であるということに文献上はなっておりますので、それについて私は述べませんということです。述べないというか、もう大和言葉化しているだろうと言っていいと思っているものですから、ここでは細かいことは言わないというお話です。

つまり確実に当該国の外の人々を語り、それでも、そこにすら日本国域からの移住者がいるのだということを説明したいと思いますので、少しでも南の人々がいると、普通に考えたって、いるのですよと言えそうなところは除外しましょうというお話です。それでもいるのだということを言いたいということです。

上記のように、それら城柵設置地域からある程度離れ、地理的境界となり得る河川や、山地によって隔てられた地域を選択いたしました。

考察する時代は、今、述べた地域に後北 C2-D 式土器が広く分布した時期、これはほぼ古墳時代前期並行期になりますが、そこから平安時代の中期まで、実年代にして 3 世紀後葉から 11 世紀までを対象といたします。古墳時代前期並行期は東北北部においては弥生時代中期までのような多様な器種をそろえた土器組成が失われ、これは考古学じゃない方には難しいところではありますが、例えば縄文時代の終わりごろ、亀ヶ岡式土器といわれているような土器とかありますが、ああいうころは器種がたくさんあったのです。

煮沸するための道具もあれば、鉢もあります、保存具である、つぼもあるというふうに、複数の器種があった時代が長かったのですが、それから弥生時代の中期まではそうだったのですが、弥生時代後期といわれるあたりから、実は東北北部や北海道南部は深鉢のみ、あるいは片

口といわれるちょっと注ぎ口が付いたような土器、この 2 種類しか実は作られなくなる時代があります。そこら辺から話しますよということです。ですから弥生時代中期までとはなぜか生活様式が変わってしまったのですよということです。その変わったところから話をします。

東北北部も、むしろ同時代に北海道南部に近い器種のみが使われていた時代があったのです。そして住居跡が、先ほどの八木光則さんのお話の中にもありましたが、見つかりづらくなったと、見つからなくなりました。それから集落遺跡等、認識できる遺跡がなくなる時期です。もちろん人間が住んでいるわけですから当然、屋根がなければ生きていけないので、屋根はあります。

住居がなかったなんて、私、言いませんが、要するに構築物として土に埋め込まれるような、あるいは表土を掘っているかもしれませんが、今の発掘技術では、表土をはぎ取ってから調査していますから、そういうものでは見つからない状態の住居になっているぞということです。私、別に住居がなくなったとか、人がいないとかということを言いたいわけではなくて、その後とは違うのだということを言っているわけです。

集落遺跡と認識できる遺跡がなくなる時期、そこから始めるわけですが。それから 10 世紀後葉から 11 世紀というのは、東北北部と北海道における人々の交流が非常に活発になっています。これは文献史、考古学でも豊富な研究がありますが、特に道東ではトビニタイ文化と呼ばれている文化、擦文文化とオホーツク文化が融合した形式の文化が見られるころです。その辺までを対象といたしましょうということです。

私の方法ですが、文献資料を残さぬ地域の人々の生活について物質文化を資料として語る場合、考察に用いる文化要素は多ければ多いほどいいと思います。そこで使える情報はすべて用いるのが望ましいのですが、時間もありませんし、本報告では 7 種類に限定して次のような考察を行います。1 つ目、集落遺跡の分布を見ます。その分布範囲や住居数の変化を見て、その背後にある人間活動を考えています。それから 2 つ目としては住居構造。先ほど八木さんの話がありましたので、細かいことは私が述べなくても結構かと思いますが、その系統を考察します。

それから 3 つ目、土器の器種と製作技法。器種組成と製作技法の系譜を考えてみます。4 つ目、馬飼の有無。東北北部に住んでいた人、文献上は蝦夷と書かれた人たちですが、その方々が馬の民であるということをよく強調されていますけれども、もともと本来、日本列島には馬はすんでいなかったわけですから、突然、古墳時代に朝鮮半島経由、あるいは南の可能性もありますが、系統は 2 種類考えられてはいますけれども、馬飼が始まります。いずれにしても古墳文化の要素です。その古墳文化の要素である馬が東北北部の主要な生産物と言うと変ですが、特別なものとして認識されるようになるわけですが、それはなぜか、その系譜についても考えます。

5 つ目、墓の形態。これは先ほどの八木さんの話の中にもありましたが、いわゆる末期古墳。北海道式古墳については少ししか私は述べませんが、その古墳は古墳文化の墓であるということについて考察しています。それは形態を比較することによって、あるいは大きさを比較することによって考えています。6 つ目としては、墓の副葬品、供献品、それらの種類や数量から利用法の系譜を考えます。

それから 7 つ目としては、石鏃、銛、ラウンドスクレーパーの有無をもとにした、その製作者について考察いたします。特に土器やこういった石鏃、石器については、誰が作ったのかというのを考えなければあまり意味がないと思います。例えば女性なのか男性なのかですね。先

ほど、香川の入植者の写真、あれは男の写真だけが載っていましたが、あそこは男の仕事の場面なわけです。

家では子供の面倒を見ているお母さんがいて、その子供が元気に育たなければ社会は成立しないわけですから、実は女の人のやっている仕事こそ重要なわけですが、その女の人の部分が代表される物質文化としては、深鉢については女性で考えられるだろうと思います。ただし、坏であるとか、あるいは須恵器とか、そういったものは男かもしれませんから、その都度、どの社会的位置にいる人が作ったのかについては言及しながら進めます。

それから石鏃については、普通は男だろうと。それから銛も男でしょう。ラウンドスクレーパーはもしかすると女の人かもしれません。ですからこれは生業に、どういった活動にかかわるものなのかによって、これは見ているもの、文化の系譜として1つだけ取り上げてしまった場合には、そこだけを拡大して評価してしまうと少しずれる場合がありますから、できるだけさまざまなものを見たいというのは、そういうことなのですが。石鏃、銛に関しては男の文化を見ている可能性がありますよということです。

以上のように、それらの物質文化の存在がいかなる人間活動を反映しているのかを考察し、特に集団の移住、および婚姻による個人の移動の視点から説明したいと思います。

次のところが文字で資料が書いてありますが、文字を見てもあまり分かりませんから。そうだ、これは表がありましたから、いいんですね。まず、東北地方の集落の分布を見たいと思います。ただし最初の時代、後北C2-Dについては、地図は付けていませんので、この第1表という、13ページ、資料編の方の一番最初になりますが、これだけを見ていただきたいんですが。一応、砂沢式のころから付けておきました。つまり後北C2-Dは真ん中になりますが、それ以前にはそれなりに遺跡があったのですよというお話をしたいと思っているわけです。

これは青森県域です。これは分析といいますか、データ自体は青森県の県史を編纂された方々が、悉皆調査のような調査をされて出してきたものですから、正確といいますか、2005年段階ではこれ以上の遺跡はなかったのだろうと思いますが、それをそのまま、ただ私が表にしただけです。弥生前期、弥生中期、弥生後期まで、それなりに字が見えますが、ただ、細かく見ますと例えば砂沢式の時代で終わっちゃっている遺跡とか、砂沢から次の弥生中期まで続いている遺跡、あるいはそれらの時代がまずなくて、弥生後期にいきなり始まる遺跡というふうに、こんなふうに遺跡はあるのだということです。

普通、数代しか遺跡は続きません。発掘すると分かりますけど、3世代ぐらいかもしれないのですが、数世代で途切れる場合の方が多いはずです。それはそこで死滅してしまうというわけではないでしょうから、どこかへ移動するのでしょうが、それらをここにあるものをつなげますと実は人の移住といいますか、移動が見えるかもしれませんが、ただ、これは発見されている遺跡だけの話ですから、これだけですべてを語ってはいけないのですが、遺跡の立地条件に関して言えば、生業を反映するといいますか、生活様式を反映するはずですから、そこを見たいと思います。

そうしますと後北C2-Dまでの遺跡というのは、だいたい弥生時代までの遺跡の立地と似ているかなというところです。「かな」というのは、例えば18番なんていうのは中津軽郡相馬村の遺跡ですが、これは砂沢の時期にもあり、ちょっと飛んで、ちょっと空きますが、弥生後期にあっ

て、後北 C2-D のころにあるという感じになりますから、後北 C2-D のころというのは、弥生時代の遺跡に似たような立地条件にあるぞということなのですが、それが突然、北大 1 式以降になりますと、もう丸がないのです。

これは同じところには住まないということです。人がいなくなったとは申しませんが、同じ生活様式ではなくなったといいますか、非常に人口が減ったという言い方もできるかもしれませんが、いずれにしても見つかっている遺物というのは土器ですが、土器が出ていたり、お墓が出ているのが数遺跡しかないわけです。これが東北北部です。東北北部といっても青森県域なのですが、秋田県域にはほとんどこの後北 C2-D の出ている遺跡はないようです。いくつかはやっぱりあるのですが、東北地方で見ますと、西よりも東側に偏っているという傾向がどうもあるようなのですが、こんなところです。

次、第 2 表を見ていただきたいのですが、次の 14 ページ、15 ページです。これは私自身、北海道の研究をそれほどしてないものですから、北海道で載せてあるのはたった 7 つですが、北海道のものはもうちょっと後にもう 1 回、お話をいたしますが、ここでは大きな集落がつくられているのは、竪穴住居が出てきた時期ということになるのですが、ここに載せてあるのは竪穴住居が見つかった遺跡だけです。土器が見つかった遺跡ではありません。

竪穴住居が見つかっている集落遺跡といえるものですが、これはぱっと見て 7 世紀以前にはないのだということです。北海道の場合は 7 世紀後半ごろから出てくると。それからその下の 8 番以降が東北北部といっても津軽側、日本海側なわけですが、日本海側は 8 世紀の前半にならないと集落が見つからないのです。ただ、これ、土器がないとは言っていませんから、土器自体はぱらぱらと出ていますから、人がいなかったとは申しませんが、人口が少なかったということは言っていいと思います。

それが東北北部の西側に関しては 9 世紀の前半ぐらいから次第に増えていくと。ぐっと増えるのは 9 世紀の後半です。これは先ほどの後北 C2-D の時期と比べますと、在地の人が仮にそのまま続いたとしても、いきなり人口が増加するようになるのはなぜかというのを、答えなくてはいけないと思います。生活様式が変わるのですが、なぜ、いきなり変えるのですかということです。

私の場合には最も合理的な説明の仕方は、移住だろうと思っているということです。そうしないと、それまでそれほど人口を増加させなくてもいいと思っていた人が、いきなり人口を増加させなくてはいけないと思うというのは、どういうことなのか私にはまったく分からないので、そう考えているということです。

とはいっても、特に 9 世紀後半に集落が増えたといっても、突然終わるのです。多くは 10 世紀の前半に終わっています。これは細かく見ますと、実は 10 世紀の初頭には終わっている遺跡が多いのです。その後、いくつかだけが存続している、あるいは少しずれて続いていく。細かいことはもう 1 回、後でお話しいたしますが、ここでは現象のみ最初に見ておくつもりなのですが。

大切なのは集落というのは普通そんなに長続きしないのだということです。これは我々だってそうです。洞爺村、先ほどの香川もそうですが、今、3 代目、4 代目か 5 代目に入りつつあるはずですが、もう離農している方もいます。もちろん東京あたりで人口が多いところでも、息

子さんたちは別のところに住んでいるという方が実態でありまして、同じ人たちが住み続けるというのは数代で終わるという方が多い。それがどうもある時期以降からの、長く存続している人たちが偉いといいますか、そういう意識があるのか、遺跡も長く続いているものだという頭が我々の方にあったかと思いますが、実はそうではないと思います。

次に15ページの第2表を見ていただきたいのですが、これは上10ぐらい、83番までが秋田県なので日本海側になりますが、秋田県も8世紀の後半まで集落遺跡は見つからず、9世紀になってから見えてきます。これは県北です。秋田県北ですから、ちょっと語弊がありましたが、先ほどの米代川流域のみですが。それからその下、84番から下は太平洋側です。先ほどは日本海側でしたが、こちらは太平洋側です。東北北部の太平洋側。

青森県の東側と、それから岩手県北の東側ということになりますが、ここは少し西側に比べて早くから人が入っています。7世紀の前半から集落が増え始めます。ですから100年ぐらい、こちらの方が古く、集落が増え始めるということになります。それから住居は見つかってないのですが、墓が見つかっているところもありますから、それについては入れておきました。

あ、これ、ちょっと解説を入れるのを忘れましたが、二重丸になっているのは20軒以上の住居が見つかっているものです。プラスが正確なことは忘れましたが、9軒以下がプラスです。それから10軒台が丸、20軒以上が二重丸です。そして住居数は数字で右側に書いてありますが、これは延べの数ですので、その時期ごとのものは二重丸かプラスか丸かで見ていただきたいのですが、津軽地方はいきなり、そこで人口が増えたというより、いきなり最初から20軒以上あるような集落が登場するのです。それに比べて太平洋側の方はこの10軒以下の集落が多いということです。人口もそんなに急激に増加してないということが分かるかと思います。

次は16ページです。これがその地図です。地図を付けておきました。これで東側に偏って、集落がつくられ始めるのだということが分かると思います。7世紀、8世紀には西側ではなくて、東側に集落が増えるのです。これは普通に考えますと、昭和30年代まで岩手県北以北というのは実は米は作られていません、ヒエを作っているところでありまして、農耕といっても雑穀栽培に適しているわけで、水稲耕作に適しているのはむしろ津軽側です。それなのにそちら側では人口は最初増えないのだということです。集落は最初開かれない。しかしながら9世紀以降に増える。下の段、2つですが、そちらは数倍、東側よりも西側の方がいきなり人口が増えるのです。これをどう解釈するかということなのです。それはもう1回、後ほど、お話をいたします。

17ページは北海道のところですが、これが今日、お越しの澤井玄さんの図をそのまま使わせていただきました。これは澤井さんが編年に使われました土器も右下に付けておきましたが、7世紀から8世紀のもの、北大式とそれから土師器、これが1期、ローマ数字の1、左上です。その遺跡の分布と数と竪穴住居の数の図です。それから2期というのは8世紀台から9世紀前半、それから3期が9世紀後半から10世紀前半、4期が10世紀後半から11世紀前葉、5期が11世紀前半から12世紀前半と。実際はもうあと2つ、地図が2期、付くのですが、今回の私の話でここまでで削らせていただきました。

竪穴住居の数を見ますと、実は渡島半島に注目していただきたいのですが、渡島半島の西側は7世紀、8世紀にも実は竪穴住居が見つからず、8世紀台、10世紀前半まで、とにかく見つからない。それが10世紀後半になりますと少し出てくるということです。10世紀後半以降は竪穴

住居の数でいきますと、こうなるかもしれませんが、奥尻島にも青苗遺跡等、大きな遺跡はあるのですが、竪穴住居は見つからないのですが、傾向としては津軽地方に人口が増えて、そして次の段階、10 世紀後半に北海道と本州の交易が活発になると、この渡島半島のあたりは人口が増えるというところが見えるんですが、これは後ほどお話しいたします。

それからこれは瀬川拓郎さんがおっしゃっている、青苗文化という呼び名で呼ばれているところの人たちが、その文化の担い手かもしれませんが、北海道の遺跡の分布状態というのはこうだと。石狩低地帯あたり、道南に私の場合、入れていますけれども、その石狩低地帯のあたりがいつも人口は多そうなのですが、9 世紀の後半、9 世紀以降を擦文土器と私の場合、呼んでいるんですけれども、そのあたり、特に 9 世紀後半から上川盆地のあたりであるとか、あるいは道東、道北にも遺跡が増えてくるというところに注目しておきたいと思います。

そして、またこれは図版で説明をしていきますが、次の 18 ページは東北北部と違って、北海道の先ほどの遺跡が集中しているという石狩低地帯、ここでは実は 1 世紀の終わりぐらいからずっと遺跡は続いていますよというお話です。東北北部とは違うのだというお話です。東北北部の続縄文と違うのですよというのは、八木さんのお話の中にもありましたが、東北北部の場合、続縄文の遺跡の立地、つまりそこで生活をしていた人たち、続縄文時代の人々の生活する自然条件と、どうも 7 世紀以降の人たちが選択する自然条件は、東北北部の場合は違います。しかしながら北海道の場合は違う場合もあるかもしれませんが、基本的には同じところに住んでいますよという話をしたいと思って、これは付けました。

ですからこの地図は恵庭市、千歳市の、その千歳川流域のものですが、ここには 1 番から 14 番まで丸がありますが、恵庭公園のあるあたりは少し高いかと思いますけれども、田んぼがあるところはだいたい低いところに、2 番から 14 番まではずっと遺跡が分布していると。例えば 11 番なんかは、11 番のユカンボシ C 遺跡の 10 号というのは、後北 A 式から 8 世紀台までずっと遺物は採集できますよと。少し飛んで 10 世紀台にも採集できる。

それから 13 番のオサツ 2 遺跡の場合には墓もあったり、北大 2 ～ 3 式が飛ぶのですが、その後、8 世紀台から住居が出てきます。ということで同じようなところに集落があったというのはちょっと言いづらいのですけれども、同じ立地条件のところに住居を造り始めるのだということです。それから蘭島遺跡、これは小樽市ですが、小樽の蘭島餅屋沢遺跡なんかは、後北 A から北大 3 まで土器が出続けて、8 世紀飛んで、9 世紀になると住居も造られると。このように同じ自然条件のところを生活の場に選んでいるのが北海道です。それに対して、東北北部はそうじゃないということです。

次は時間がどんどんなくなってきたので、図だけ使って、文章の方は無視して続けますが、19 ページ、今度は道東、道北の話ですが、これは私、まったく研究を自分ではしていないものですから、小野裕子さん、天野哲也さんのオホーツク文化の研究から引用させていただきました。これでオホーツク文化は、5 世紀ごろは道北、それから一部奥尻島にも出てきますが、そこら辺を中心に遺跡が見られるんですが、十和田期以降は少し増えて広がっていくと。後期になりますと後期ごろには道東では、トビニタイ文化と呼ばれるようなものも出てくるということになります。失礼いたしました。オホーツク文化ですからトビニタイはいっていませんが、オホーツク文化までのお話です。9 世紀後半以降、トビニタイ文化が出てきますけれども、それは道東

の方です。

それから次に住居の話をしておきますが、ここで私はかまどにこだわっているわけですが、なぜかまどにこだわっているかといいますと、これはなかなか思い付くものではないものですから、そこの地域で発明されたというのではなくて、やはり学ばざるを得ないと思うのですが。ここの竪穴住居は1、2が千歳市丸子山遺跡のものです。丸子山は、これは2つとも同時の住居ですけれども、片方には煙道が見えないのです。

これ、調査した方は最初、煙道がないのではないかと思っていたということですけれども、つまりこれは下にある4番、群馬県子持村、黒井峯遺跡の竪穴住居、これは軽石で一挙に埋まってしまったものですから、構造がよく残っているものですが、それを付けましたが、このように住居の外側、遠くに煙道を出すのではなくて、つまり屋根の外側に煙り出しを出すのではなくて、壁に沿って上方に煙突を延ばしていってしまうと、そういうものが、これは6世紀台のものですけれども、古墳時代のかまどなのですが、それに近いものなのだろうと思うのですけれども、丸子山というのはそのような煙道が見えないかまどです。

それから同時に千歳市丸子山の場合には、長い煙道が外側にまず延びていってから、垂直に上へいくというものが両方あるわけです。これは後に述べます。それから先ほど八木さんのお話しされていたのが、田向冷水遺跡の1号住居です。これも断面図も入れておきましたが、これではよく分からない断面図ですけれども、要するに煙道が見つからないのですが、斜め上に上っていっていると。表土からといいますか、上の方は削られてしまって見つからないのだろうと思いますけれども、少なくとも2番の丸子山のようなタイプのものではないということです。

次のページを見ていただきたいのですが、これは東北北部の東側地域になりますけれども7世紀、8世紀の住居です。これで7世紀後葉から8世紀前葉というのを4番目として、ちょうど上から2段目に4番、酒美平遺跡ということで付けておきましたが、このころになりますと、こういう煙道をかまどの炉床から外側に水平に延ばしていって、垂直に立ち上げていくと。

細かい形は先ほどのところとちょっと違っていますけれども、煙道の縦の掘り方、それが違ってはいますけれども、壁に沿って煙道を上に延ばしていくものではないのが、7世紀後葉にはこの場合、あるのですが、こういう時期の概念が丸子山には行ったのだろうと思っています。ですけれども、丸子山に入って人は古いかまどの形も知っていて、両方造ってみたというところじゃないかなと思いますので、これは移住者がいないとできないだろうと思っています。それはちょうど7世紀の終わりごろというのは、まだ東北北部の場合は短い煙道も造っていますから、両方知っている者がそれぞれ造ったのだと。

もちろん住居に関して言えば女の人が造った、男の人が造ったとかというよりも、みんなで協力して造っているかもしれませんが、先ほどの洞爺の話ではありませんが、洞爺の場合、香川から入ってきた人たちが、香川の自分たちの生活様式を最初持ち込んでしまうわけですけれども、例えばアメリカへ行った移民であるとか、ブラジルの移民も、まずは自分たちの知っているものを造ってしまうわけですね。それと同じようなことをしたのだろうというのが私の想像です。ただし、その後、そこで遺跡が続いていく場合には、北海道もどんどん家が変わっていますが、そこに適応した形というものを模索していくでしょうから、さまざまに変化していくはずなのですが、それについてはここでは示すものは、今はありません。

けれどもかまどを造るというのには、当然、何かお祭りがくっついているかもしれなくて、そういうものが読み取れそうな部分があるものですから、その話を次にいたします。それは第 5 表、あるいはその下にありました 20 ページ、21 ページの第 4 表、第 5 表のかまどの設置位置の話です。私も岩手県で何年か発掘をやっていたことがありますので、そこで同僚たちが掘っている遺跡を見に行きますと、北側にかまどがあると、ああ、古いぞと、7 世紀だぞとか、みんな言えるのですが、どうして言えてしまうんだろうと私は不思議だったのです。それをずっと考え続けていたら、こういうことじゃないかなというのが今日の仮説ですが。

実は東北北部に住んで人たちは、蝦夷が北にいるとおそらく思っていたのだろうと思うのです。自分たちは南の方から入ってきていますから、蝦夷が北にいるぞと脅されて入ってきていると。だけど全然そういう人たちには会ってない、しかし北から蝦夷は入ってくると思っていますから。その蝦夷という存在を実は知らないのです。荒ぶる神、荒神ということになるのだろうと思うのですが、その荒神、荒ぶる神を鎮めるために、荒神様を祭るというのがありますが、大方、荒神様というのは民族例でいけば、かまど神と重なったりもするのですが、そのかまどにどうもお祭りをしていたのではないかと。

それで 7 世紀、8 世紀、場合によっては 9 世紀の前葉ぐらいまでは、どうやら北側にかまどを設置しているのです。それが 9 世紀中葉以降になりますと、さまざまな方角にかまどを設置するようになる。もちろん北にも造るわけですが。というふうにこれは見えるのですが、これは北から蝦夷が来るということを恐れていた証拠なんじゃないかと、私は実は思っているのです。ただし、その蝦夷を気にしていなかったところの人たちは、どこにでもかまどを造った。

ですから北海道を見ますと、矢不来 3 遺跡と、これは渡島半島の上磯、函館から西側に少し行ったところですが、そこの矢不来 3 遺跡は北側を向いている。それから丸子山は 3 棟、北西側を向いている。先ほどの八木さんの挿図の中にあったものです。しかしそれ以外は北海道ではほとんど大きな遺跡では、末広遺跡という 8 世紀以降の大集落がありますが、そういうところなんかを見ますと、別に北にこだわってないわけです。

これは実は北海道に住んでいる人は、蝦夷のことなんか気にもしていませんから、知りませんから、かまどは造ったけれども、かまど神を別に北に置いたわけじゃないと。ただし古いころの人はどうもそれを知っていて、北に造ったのではないかなというのが私の推測なのです。そして丸子山なんかは特にそうですが、すぐに終わってしまう。わざわざああいう小高いところに集落をつくっておきながら、なぜいきなり終わるのか。これはもっといいところを見つけて移動していったのでしょうが、最初の場合だけ、どうもおっかながって、北側にかまどを造ったのではなかと私は思っているのですが。

東北北部の場合には、7 世紀、8 世紀ぐらいには多くが北側にあります。9 世紀の中葉からはさまざまな方向に造るようになる。特に黒い線で縁取りしたのは、8 世紀以前は北にかまどがあるけれども、9 世紀中葉以降はさまざまな方角にかまどを置いていますよと。つまり特に古い時代は、自然条件でかまどの設置を決めたわけではないのでしょうかということを言うために、社会的な理由で、そうせざるを得なかったということじゃないでしょうかということを、言いやすい遺跡だということで、これ、黒い枠をしてあります。

岩手県の南の方を見ますと、第 4 表ですが、ここも例えば、これは旧水沢市ですから今は奥

州市ということになるのでしょうけれども、膳性遺跡なんかは、7 世紀は大量に北側を向いた住居があるのですが、9 世紀中葉になりますと、別の方角に設置されたかまどの方が増えるというわけで、これは何が裏にあるかというと、蝦夷征討が終わりましたという宣言なのだと思うのですね。

その蝦夷征討が終わったと、あるいは岩手の場合には兜跋（トバツ）毘沙門天は坂上田村麻呂だという説もありますが、あれが日本海側にはないのですが岩手県側には兜跋毘沙門天が建てられますが、そういうころになりますと安心して蝦夷はもう来なくなったからということで、かまどをさまざまな方向に置くのではないかというのが私の考えなのです。

ですから東北北部に住んでいる人と北海道に住んでいた人の意識の違いが、かまどの設置の位置で分かるのではないかと思っていまして、移住者は東北北部には多いけれども、北海道にはあまりいなかったと。最初の時点では文化が変化する時点ではぱっと入るのですが、その後は同化してしまうというふうに考えています。その同化の話をするためには、この土器の話をしなくちゃいけないのですが、もう全然時間がなくなりましたが、その考え方の基礎的な話だけをしておきます。

22 ページです。これは砂沢式、縄文時代の晩期の最終末から、弥生時代の前期の最初のころの土器を並べたのですが、これは土器の変化の仕方に 2 通りあります。あるいは 3 通りと言ってもいいですが、大きく分けると 2 通りです。1 つは一番上の土器ですが、これは精製土器と我々、呼んでいるものですが、時間をかけなければ作れない精巧な土器です。これについては変形工字文という文様が、これのみ付けられます。

その下の方にある 3 番とか、4 番にある、煮沸具とか、あるいは保存具のような日常の生活用具には、この変形工字文という文様は絶対に付けられないのです。それから製作時間を考えますと、おそらくこの精製土器は長くかかるのですが、3 番の煮沸具はささっと作る、手際よく作るんです。この手際よく作っている方が、実は女の人の土器だろうと私は思っているわけです。

これは私どころか、普通に考えられるわけですが、普通には子供の面倒を見る人がお母さんということになりますから、そのお母さんは死んではいけないので死なない活動をしなくちゃいけなくて、それは土器製作なんかはその 1 つになるわけですが、その方々が作った土器がこの 3 番、あるいは 4 番の煮沸具、保存具です。それに対して作らなくてもいい土器、なくても生理的には生きていける土器というのが、この精製土器でありまして、これは男の仕事なのだろうと思っていまして。

この分布範囲が実は違うのです。精製土器の分布範囲は、極端に言いますとこの砂沢式にいえば青森県のみです。それに対して粗製土器は、これに似たような土器というのは北海道までも広がってくるわけです。あるいは東北一円に似たものが当然あるわけです。あるいは少し似ているけど違うというのが、ばっと広がっているのが、この粗製土器の特徴です。

その最たるものは遠賀川系と呼ばれているものですが、例えば 4 番の数字のすぐ上にある遠賀川系土器、これは弥生の影響を受けている土器だといわれていますけれども、それは模様だとか、器形の一部がそうなのであって、どこにもこれと類似して、どこにもというか、いわゆる弥生文化の本場にはこれと同じ形態のものはないのです。ただ模様は似ている、あるいは口縁が外反するという特徴が似ているというところでありまして、まったく同じものはない。で

すから系というふうに付けられているわけですが、これは向こうの知識を持ってなければ作れない土器です。

なぜそういうものが発生するかというと、これは婚姻で向こうの土器を知っている女の人がこちらに来て、向こうのことを思い出しながら、つまりこちらにないものですから、作らざるを得なくて作ったのだろうというのが私の予想です。それに対して煮沸具の方を見ますと、煮沸具は当然こちらにもありましたから似たようなものを作るのですが、機能はまったく同じですけれども外反する口縁を作ってしまったり、あるいは波形で調整をしたりというふうに、向こうの技術も入れるわけです。そのように内部のみでは発生しないような文化要素も加わるのが、この粗製土器です。

それに対して精製土器は、その弥生の影響はまったく受けてないのです。遠賀川の影響なんかちっとも受けていません。つまりこれは弥生の方にも高坏はあるのですけど、その影響は一切ないのです。これは晩期からの変化の､1 方向の変化の延長にある形をしています。文様もまったく影響を受けていません。これはつまり男、つまりというか、影響を受けない人とは誰かというと、その遺跡に居続ける男の人なのだろうと思います。

そして男の人は動かないものですから分布範囲が狭い。ですから極端に言うと精製土器は青森県内にしかありませんよと言ったのは、それは男が何らかの関係を持っている範囲です。女の人の関係というのは少し広いものですから、例えば 2 番を見ますと、2 番の 6 というのは砂沢遺跡から出てきているものですが、この文様を見ていただきたいのですが、この模様は 5 番の津軽、下北、道東の入組文系土器の 5、これは釧路市の幣舞遺跡ですが、ここにまったく同じ模様が入っています。

しかしこの模様は下北や津軽、東北北部では、この小さな台付きの鉢にしか付かないものなのです。それなのに北海道ではこういうふうに甕に付くのですね。同じようなものは日高のえりも町、油駒遺跡からも、23 番、24 番、25 番、このようなものが出ていますが、本州ではこの文様は煮沸具には付いてないのですが、でもこの台付きの鉢というのは、実は煮沸具なのです。この数字が書いてある 4 とか 3 とか 6 の部分、台の部分はもう真っ赤にピンク色に 2 次焼成というか、何回も焼けていまして、これが煮沸具だということは分かるのですが、日常用具に付いているものです。つまりそれを作る人、女の人が付けている文様なのだろうと私は思っていますけれども、そういう人が釧路にも行っていたという証しだと思っているのです。

それに対して砂沢式というと、普通、精製土器ばかり語られますけれども、その精製土器は北海道では作られないのだろうと思います。ですからこの油駒遺跡は 11 万点、この赤石慎三さん方が丹念に整理されたそうですが、私も実は見に行きました。ほぼ、こんな破片までわっと広げましたが、やっぱり 11 点ぐらいしかないのです、砂沢式と呼べるものは。ですからこの土器は、胎土分析等はしていませんけれども、土器が運ばれたのであって、製作者は来ていない。

つまり津軽では大切にされているこの高坏とか、浅鉢ですが、北海道では必要ない土器なので作らないのです。その製作者も来てない。つまり男性は来てないのだというふうに、来てないといいますか、普通には、いろいろな格好で入っているとは思うのですが、土器を作るという格好では入ってないということが読み取れるわけです。それに対して、今回はちょっと時間がなくて言えませんけど、例えば石鏃の動きなんかを見ますと日高のもしかしたら男性が津軽

あたりに行ってとか、あり得るのですが、それは石鏃の形からちょっとは読み取ることも可能なのですが、基本的には女の人がどうも婚姻関係を結んでいる範囲が、土器の似たような煮沸具が作られる範囲です。普通に土器の文化圏と呼ばれているのは、どうも婚姻の範囲なのだろうなと私は思っています。

もう時間がなくなってしまったので、結論だけ述べて終わりにいたしますが、土器が、特に煮沸具ですが、煮沸具が類似している、まったく同じとは言いません、ある部分が似ている範囲というのは、相互に女の人の婚姻関係がある範囲です。婚姻ですから、行ったとき向こう側の指示に従うわけです。ですから自分の持っていた技術もそこに加味しますが、いわゆる融合形式みたいなものが生まれるというのは、そういうことなのだろうと私は思っていますが、それは婚姻関係が続いていた証しです。

ですから後北 C2-D 式に関しては東北北部と北海道に分布しますが、それは東北北部と北海道で婚姻関係があったから土器が作り続けられたのです。婚姻関係があったから、ほぼ同時に土器が変化するわけです。婚姻関係がなくなりますと、土器が同時に変化する理由なんかなくなってしまうわけです。その後、実は婚姻関係がなくなるのですが、すみません、ちょっと時間がないけど重要なことなので説明いたします。

23 ページのところを見ていただきたいのですが、第 8 図ですね。これは左側に北海道南部、右側に東北北部の土器を並べたのですが、3 世紀後葉から 4 世紀後葉というのは、後北 C2-D のころはほぼ同じ土器が作られています。細かいことを言うともちろん違うところが当然あります。それは作った人は違いますから、さまざまな思いで少し変えたり、発掘で出てくるものは、昔のものを全部見つけているわけではありませんから、たまたま比較しちゃいけないものを並べているわけです、こんなのは本当は。全然何の関係もないようなものを並べているわけです。

比較できるのはつまり頭の中、意識を見ているからこそ比較できるだけであって、別にこの土器を作った人、この 1 番の土器と 5 番の人が直接関係していましたよなんていうことを、私、知っているわけではありませんので、頭の中に同じようなものを持っていたので、似たようなものを作っているというお話ではありますが、そういうことが可能だったのは、これは相互に婚姻関係をして、煮沸具を作る人の行き来があったからです。

それがなくなってしまうのがこの北大 1 式。この北大 1 式を最後にしてなくなってしまうということです。東北北部の方は遺跡はほとんど見つかりませんけれども、田向冷水遺跡からはこのような土師器が出てくる。5 世紀の後葉です。そのときには北海道には当然これらは行ってない。婚姻関係を持ちませんから、この田向冷水の人たちがそこでの婚姻関係を持たなかったので、数代で終わってしまったのでしょうが、また戻るのか、いなくなりますね。

それがしばらくたって 6 世紀の後葉以降になりますと、東北北部では集落が増え始めます。これは人が入ってきたのと同時に、そこで婚姻関係を継続し始めるわけです。婚姻関係ですから、女の人はどこからもらってくるか、複数ありますね。そのもらってきたところとの関係が出てきます。ですからこれは細かいことを見ていけば、家ごとの土器とか、土器を誰が作ったかの問題が、これ、先ほどまでの続縄文時代までの土器の見方と同じではいけないはずなので、ちょっと難しいのですが、この煮沸具や保存具だとか、土師器になりますと、誰が作ったかと、これは単に一家の主婦です、なんて、そう簡単に言えなくなってしまいますので、これはちょっ

と綿密な見方をしなくてはいけないのですが、ただ、いずれにしても東北北部の場合、この 6 世紀後葉以降は、そこで婚姻関係を持ち始めます。

ただし、その持った先は実は北側ではなかったということです。隣側、北大 3 式の人たちとは婚姻関係を基本的には持ってないのでしょう。当然、少しはあるはずです。それはどんな場合もあるのですが、基本的にはまずない。しかし 100 年たって 7 世紀の末葉ぐらいになりますと、丸子山遺跡がその好例だと思っていますが、東北北部から移住者が行って、そこでそこの中でまた婚姻関係もあったりして、少し南にもやってくると。そういうものが少しずつ始まるだろうと思います。でも 100 年ずれているということです。

先ほどまで後北 C2-D のころまでは、ずれなんかなく、同時に土器は変化していったわけです。それは要するに婚姻関係を持っていたからです。しかし、この 6 世紀後葉以降は婚姻関係は持たなかったものですから、土器が同時に変化をしなかった。100 年ずれて始まった。その 100 年の間に少しずつ何か関係があったからなのだろうと思いますが、それは先ほど、八木さんの説明にもありましたが、東北北部の方からの移住者というか、ピークが 7 世紀後葉に集落がありますよとありましたが、東北北部の人たちが北海道も開拓といいますか、行った可能性があるわけです。

ただし、それはそこで長続きをしないので、次のページを見ていただきたいのですが、長続きといいますか、関係は、北海道の場合には今度、在地の人と婚姻関係を結び始めますから、土器はどんどん在地化していくわけです。北海道の場合はおそらく女の人が土器を作っていますから、その土器に戻っていくわけです。そんなふうに思っています。

これは実は古墳からも言えるのです。それも重要ですから述べておきますと、25 ページ、古墳ですが、3 番が丹後平古墳群で八戸の非常に有名な古墳ですが、これはまったく同じスケールにしてあります。4 番が西島松 5 遺跡ですが、これは 50 メートル四方ぐらいのところに 84 基ほど土坑墓がありますが、同じですと十数基しか末期古墳はつくられないのです。そういう人 1 人の重さとは言いませんが、葬られる人の占める面積が 1 人で 20 人分なのです、丹後平の場合は。

1 番を見ていただきたいのですが、丹後平古墳群でも立派な部類のものを選びましたが、15 号墳ですね。これは森ヶ沢遺跡というのは、その丹後平古墳群があるあたりから 20 キロぐらい北に行ったところにある遺跡ですが、そこの 5 世紀中葉から後葉ぐらいの土坑墓ですが、これは 20 基もここにあるのです。ですから土坑墓を造る人たちの観念といいますか、墓についての概念と、この末期古墳と呼ばれている墓を造る人たちの概念はまったく違っています。それを学ぶだろうかと私は思うのですね。学んで、まねしたいのだろうかと。まねしたいのだとしたら、もう同じ穴のムジナになっています、戦争する人たちと。それはまねをしたのではなくて、やっぱりそれも何の不思議もなく、こういう墓を造る人たちが移住してきたということなのだろうなと、私は思っているのです。

ですから物質文化はいくらでもまねできますから、例えば我々の生活様式、ここをばっと見たら、アメリカやイギリスとそう変わりがないねという話になると思うのですが、言葉は違っています、あるいは考え方が違っている。ですからその考え方をどうやって物質文化から読み取るかというのが、重要なのではないかと私は思っています。この墓の造り方、まず面積からいっても全然違う。ですからこれは墓に対する感覚が違うということです。

それから土坑墓というのは、人を1人ぴったり埋める大きさです。下にありますが、西島松5は1メートル×1メートルなのです。人がちょうどひざを抱えた状態で座れるような大きさですが、東北北部の土坑墓も容積はほぼ同じです。ただ、これは上、削られていますから浅くなっていますけれども、1人葬るための土坑墓というのはこんなものです。それが1人の人を埋めるための墓が、末期古墳の場合、こんな数倍の容積を持つようになっている。ですからこれは墓を造る概念が違う。

それから土坑墓の場合、屈葬ですが、屈葬している理由は何か。それはさまざまあるかもしれません。そんなことは分かりませんが、でも屈葬にしなくちゃいけない理由があったのだと思うのです。それをなぜ捨てるのかということです。それを土坑墓を基本にして古墳をまねたのだとしたら、重要な部分を捨てたら何ですか、それが同一の文化ですか。それは違うのじゃありませんかというお話です。

それから婚姻の話をできるかと思って、丹後平古墳と、それから阿光坊古墳の副葬品の話をしておきます。これは丹後平古墳群は53の古墳があるのですが、そのうちの25だけから副葬品が見つかっておりまして、この玉類を持っている人と玉類を持たない人というのがいまして、これは分布がきれいに分かれるんです。これは報告書を書いた方が作ったものを、私がちょっと手直しをしたものです。

これが刀が埋められている、副葬品として立派な刀を持っている人たちの墓が1列ばっと並ぶのです。その脇に玉類を持っている人、あるいは何も持たない人が並ぶのです。大きさも違います。これも玉類ですね。この1、2、3、4、この4つは管玉を持っている人です。これが管玉を持っている人ですね。この管玉はちょっとしかないのです。1個から4個しか持っていませんが、どうもこの管玉が一番重要なようでして、その人たちが埋められている場所がこれなのです。

こんなのはどう解釈するかですから、あまり意味がないかもしれませんが、いずれにしても、意味がないかもしれないと言いませんが、玉類はたぶん女の人なのです。細かいことは言いませんが、皆さんも見ていただければ、きっと理解していただけるのではないかと思うのですが、刀を持った人と、玉類を持った人で分けられると。そして玉類を持った人はどうも女の人のようなのですが、そうやって考えると、その玉はどこから来るか。

生産遺跡は全部、山陰です。これは玉類の専門家が言っていることですが、7世紀の前半で生産はストップしています。これは7世紀の後葉から8世紀の前葉までの遺跡ですが、これは死んだ人の墓ですから、生きていた時代はもう少し古くなります。ですから7世紀の前半まででストップといっても、そのときの玉がどうやって入手していたか。生きている間に手にしていた、生きているというか、その埋められた方が何歳で死んだか分かりませんし、何歳のときにもらったか分かりませんが。

もう1つ、分からないことといえば、この人たちは女の人だとすれば、女の人ですから婚姻でどこかから来るのです。すると来たときにすでに玉類を身に付けていたのか、来てから玉類をもらうのかですが、いずれにしてもこの玉類は古墳文化のものですから、おそらく古墳文化の出の女の人なのですよ。何でそんなおそらくなんて言えるかというと、北海道にはこの時期、玉類はないからです。

西島松遺跡は立派な副葬品を、立派といいますか大和の方から見れば立派なものといいますか、刀をたくさん持った墓ではありますが、玉類は 1 点もありません。同時代です。ですからここの人は、北海道の人と婚姻関係を結んでいるわけではないということです。ここの人は南の人としか婚姻関係を結んでないのです。副葬品がない人のことはちょっと分かりませんけれども。

しかしこれは 100 年ぐらいは続いている遺跡ですが、53 ぐらいしか古墳がない。住んでいた人の全員が古墳に葬られたわけではないのです。古墳に葬られる人はやっぱり特別なのですね。ですから階層性を認めないとか言われますけど、ま、八木さんは階層性は読み取れそうだというふうにおっしゃっていますけれども、階層性がないこと、それから時代がずれていること、形式が古墳と違って土坑墓から発展したのだという、この 3 つの属性から古墳ではないというふうに一般的にはいわれていますが、私はどの点を取っても古墳だと思っています。

階層性は読み取ることができます。つまりさっき言ったように 1 人の人が占める面積はまったく違う。ここに埋められてない人がたぶんいるのですよ、古墳が造られない人が。それと違う。それから持てる人と持てない人がいるわけです。特に玉類の場合は玉を持っている人もいるわけで、その中でも階層性は見えます。それから持たない人もいる、そういうことで階層性は読み取れるし、もちろんその場合の階層性といっても、古墳時代前期の政治秩序の中での階層性ではなくて、そういう階層性ではありませんけれども、古墳文化の新式の群集墳の時代です。

ちょっと重要なことを言い忘れていたのを思い出しましたが、6 世紀の後葉以降というのはどんな時期かといいますと、もう前方後円墳は造らない時期です。群集墳の時代です。群集墳はずっと日本列島各地に造られますけれども、駿河地方の例えば静岡県の群集墳はこういうものです。これはもう完全に竪穴系のものでありまして、竪穴系というかこれは横穴式と分類されているものですが、墓坑を持っているものとして分類されるタイプでありまして、東北北部の末期古墳と同じように、まずは主体部としては土坑を掘るのだというものでありまして、土坑を掘るから古墳じゃないという議論は成り立たないと思います。

それからさっきの 3 点で時期の問題ですね。丹後平は 8 世紀の前葉まで、それから阿光坊の場合には少しその後までもあるようですが、いずれにしても始まりが重要でありまして、始まっているのは新式の群集墳の時代です。信州にもあります。長野県の場合、5 世紀から積石塚ってありますが、あれは 8 世紀の前半まで続きます。先ほど八木さんが使われていた、あ、使われてなかったか、松本の中山古墳群というのがありますが、あそこは非常に大きな群集墳ですけれども、8 世紀の前半まであります。それから見島ジーコンボ古墳群なんかは 10 世紀まで続くわけです。

そういうものはいくつかありまして、そのように制度上、あるいは政治上は古墳時代は終わってしまったとしても、自分たちの文化伝統といいますか、アイデンティティーということで墓を造り続けた人たちというのは、いてもおかしくはないと思いまして、私の場合は時期のことも始まっている時期さえ問題なければ、文化の系統からいけば古墳文化でしょうというふうにいえると思っています。しかしそれも途中で終わるのです。ですからいつまでも古墳時代では当然ありませんし、文化はそうやって変化していくというわけです。

すみません、時間が超過してしまいましたが、結論的なことを言いますと 28 ページのところ

にあることが結論で、3 世紀か 4 世紀は東北北部、北海道南部は同じように婚姻の関係がありましたよと。東北中部以南はそこで婚姻の関係がありましたよと。それが 5 世紀後葉になりますとオホーツク文化ができてきますが、このオホーツク文化の登場も、おそらく関係していると私は思っているのですが、これはちょっと分かりません。

ただし、その北大 I 式なんかは、十和田の円形刺突紋との関係というのはあるのでしょうから、女の人同士の交流といいますか、婚姻関係がちょっとあったりして、新しい土器型式が生まれるということはあるのだろうと思うのですが、男の文化ということでいけば、銛頭の研究、恩師でありながら、前田潮先生の研究をまったくまともには引き継いでないのですが、前田先生の研究でいけば、銛頭に関しては恵山式から続いているわけです。

けれどもそれは擦文文化も同じです。銛頭に関しては恵山から続いているわけです。ですからそれは男の文化ということになると思うのですが、それと女の人の文化というのはちょっと違いがあるので、私、このオホーツクと擦文については何とも言えないのですが、ただ、なぜ 5 世紀にオホーツク文化が生まれてくるのか。この 5 世紀というのは非常に重要なのだなと思っています。

発表はこうなることは目に見えていたものですから、発表しなくても理解していただけるかなと思って書いてはおきましたが、実は 5 世紀の段階に日本列島上には須恵器が入ってきたり、食器の様式が全部変わるのですね。それと連動しているのです、まったく東北北部も実は。それからそれはオホーツクもそうです。そういう意味では今日の田中聡さんのお話ではありませんが、東アジアとおそらく連動しているのだと思います。

ただ、私にそういった力量がないので、5 世紀に東アジア全体がどうなっているのかというのはまったく分かりません。しかし片鱗はここに出ているなと思っていまして、重要なことは 5 世紀の後葉に東北北部にも古墳文化の影響が行ってしまうということですね。大和言葉化してしまうと。大和言葉化が完成するのは 6 世紀の後葉以降なのですが、その 6 世紀の後葉以降の土器は実は須恵器模倣の土器です。

ちょっと分かりづらくなったかもしれませんけど、田向冷水遺跡という遺跡が 5 世紀の後葉に八戸にぱっと入ると言いましたが、あのときは実は本当は須恵器模倣系の土師器は入ってないのです、おそらく。ちょっと交じっているのですけど、遺物は。ただし住居から出ている 1 層とか 1 層じゃない住居の床面とかをちゃんと見ていくと、実は分けられますが、5 世紀の後葉にはまだ田向冷水遺跡には須恵器模倣系の土師器は入ってないのです。あるいは内黒の土師器は入ってないのです。

それが 6 世紀の後葉段階になりますと、須恵器模倣系の土師器が入ります。須恵器模倣系の土師器が普及するのは、群集墳の時代なのです。群集墳が造られる、あるいは横穴式の石室を持った古墳が造られる時代というのは、馬飼が始まるとか、さまざまな文化要素が変わった時期でありまして、そのときに日本列島中に人々が移住するのです。その一部です、東北北部に人が来るのは。

ただ、それが最初は根付かないのです。100 年たって 6 世紀の後葉になって入ったときには根付き始めるのです。そのときは本格的な移住が始まったということだと思うのですが。その第 1 回目の移住といいますか、田向冷水のころはたぶん資源探査で来ていると思っているのです

が、そのとき日高にも来ています。それは最後に図を付けておきました。これは私が日高に学生たちを連れて、今日、いらっしゃっている森岡健治さんのところにもお世話になったのですが、悉皆調査をしたんです。

日高には何か絶対、本州的なものがあるだろうということで、収蔵庫をひっくり返させてもらって探したところが、静内高等学校の古い調査、藤本英夫先生がいらっしゃったときの調査のものですが、その中に 2 点、土師器があったのです。これはまさに群集墳のころの土師器で、5 世紀台のものだと思いますが、まだ須恵器模倣系が一般化してないころのものですが。

それを持った人が、日高は資源が豊富なところですけど、コンブもあるでしょう。5 世紀の中国へ持っていくものというのはコンブだと思いますけれども、琥珀もあるかもしれません。ま、琥珀はその後の東北北部産あたりのものですが、いずれにしても資源探査でさっと入ってきて、その後、本格的な移住が始まるというところかなと思っています。

すみません、ちょっとまとまりのない話で、しかも超過してしまって、失礼いたしました。これで終わります。

参考文献

松本建速　『蝦夷の考古学』　2006 年　同成社
松本建速　『蝦夷とは誰か』　2011 年　同成社